

地中に埋められた秀吉の石垣

大阪城天守閣
館長

跡部 信



大阪城は、“日本一の石垣の城”です。石垣の高さが日本一、石垣に使われている石の大きさも日本一、日本の築城技術の最高水準を示しているのが、大阪城です。

大阪城といえば、豊臣秀吉です。秀吉が築いた大阪城は当時、「三国無双」、「日本一堅固」などと称賛される豪壮華麗な城郭でした。ところが現在、地上で目にする大阪城の石垣は、すべて徳川幕府が築いたものです。大坂夏の陣後、徳川幕府が大坂城を再築したとき、まるで豊臣家の権威を消し去るかのように、豊臣大坂城を大量の盛り土で埋め殺しにしてしまったのです。豊臣期の石垣はそれ以来、地中で眠り続けているのです。

この意外な事実が明らかになったきっかけは、昭和34年（1959）、大阪城に科学のメスを入れ、さまざまな謎を解明するために実施された大坂城総合学術調査です。本丸の地質調査をおこなった結果、地下10メートル前後の深さで石垣遺構が見つかったのです。まったくの偶然、だれも

予想していなかった大発見でした。遺構は「ナゾの石垣」と呼ばれました。

25年後の昭和59年（1984）には、水道管の交換工事ともなう発掘調査によって、本丸の別の地点で豊臣期の石垣が発見されました。大阪城の調査研究にたずさわる関係者は、これに大きな衝撃をうけました。「ナゾの石垣」が地表から7メートル以下の深さに埋もれており、安全対策上、天端から2メートルほどしか掘り下げられなかったのに対して、こんどは地下7メートルを下端として立ち上がる、高さ6メートルの堂々たる石垣が確認できたからです。調査後に埋め戻されましたが、あの石垣を公開したい、というのが関係者たちの悲願になりました。10年後、平成6年（1994）にはその事業を力強く推進すべく、大阪城天守閣の学芸員が一名増員となりました。採用されたのが、私です。

しかし大坂城跡は国の特別史跡に指定されており、多くの制約があります。このなかに公開施設をつくるのは、容易なことではありません。上層の徳川期の遺構を破壊して施設を建てることは、許されないのです。いたずらに年月が過ぎ、いつしか私の採用の目的も忘れられました。ようやく平成25年（2013）、大坂の陣400周年を機に「豊臣石垣公開プロジェクト」の事業が動きだしました。その後もさまざま

な困難がありました。が、とうとう昨年4月に「大阪城 豊臣石垣館」がオープンしました。施設の着工から7年、プロジェクトの開始から12年、私の就職から31年、石垣発見から41年の歳月が流れていました。これほどの難事業はめずらしいでしょう。

「大阪城 豊臣石垣館」では秀吉が築いた石垣を、地中に降りてご覧いただくことができます。豊臣大坂城のオリジナルの遺構が公開されているのは、唯ここだけです。徳川再築の石垣とは異なる魅力と迫力、そして驚くべき盛り土の分厚さを、ぜひ多くの方々に体感していただきたいと願っています。



跡部 信（あとべ まこと）

1967年生まれ。京都大学大学院文学研究科修士課程修了。京都大学博士（文学）。1994年に大阪城天守閣学芸員になる。2026年4月に館長に就任。著書に『人をおくる 豊臣秀吉と大坂城』（吉川弘文館、2014年、橋本峰雄賞）、『豊臣政権の権力構造と天皇』（戎光祥出版、2016年）、『文禄・慶長の役―“国王”秀吉をめぐる虚々実々の東アジア外交―』（戎光祥出版、2026年）がある。映画「プリンセス トヨトミ」（2011年、鈴木雅之監督、原作：万城目学）、『嘘八百 なにわ夢の陣』（2023年、武正晴監督）の歴史監修を担当。